

I. 前回の授業への質問

Q: 奴隷制を正当化するにあたって、何をその議論の根拠としたのか。

A: (重要な問題なので、掘り下げて説明する)

1. 旧約聖書「創世記」などに書かれてあるエピソードの曲解

* 聖書のどこにも、黒人が奴隷であるべきであるとか、白人の方が優越しているという記述はない。以下は、あくまでも奴隷制により経済的、政治的メリットを得る立場にいた人たちが曲解して使った正当化のための議論である。

① 「カインとアベルの物語」 創世記第4章

カイン 土を耕す → (農耕民 アフリカ人 とされる)

アベル 羊を飼う → (牧畜民 ヨーロッパ人 とされる)

主がアベルとアベルの献げ物だけに目を留めたことに嫉妬した兄カインは夫アベルを殺す。怒った主は、カインに「お前は呪われる者になった」という。

他の人に殺されることを恐れたカインに主は、カインを殺すものが7倍の復習を受けるとして、「主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた」(15節)

この「しるし」を、後世の奴隷擁護論者は、「黒い肌」と考えた。

② 「ノアの3人の息子たち」 第9章

裸で寝ている父ノアの姿を見てそれを兄たちに話してしまったハム。それに対して兄たちセムとヤフェテは後ろ向きに歩き、布を父にかぶせて、父の裸を見ることはなかった。父はハムに激怒。「カナン(ハムの息子)は呪われよ 奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」(25節)

ハムはアフリカ人、セムはヨーロッパ人、ヤフェテはアジア人と解釈された。

ハムの息子カナンは兄たちの奴隷に。つまり黒人の白人に対する奴隷化の根拠であると考えられた。

③ ヨセフの政策

エジプトの地とカナン地方の人々が飢えに苦しむ。銀や穀物を集めて、人々に食料を分け与えた。ついになにもなくなる。

人々はヨセフに言う。

「銀はすっかりなくなり、、、 わたしどもは農地とともに、ファラオの奴隷となります。種をお与えください。そうすれば、わたしどもは死なず生きることができ、農地も荒れ果てないでしょう。」(18-19 節)

「また民については、エジプト領の端から端まで、ヨセフが彼らを奴隷にした。」(21 節)

他にも多々聖書のなかで奴隷制擁護論に利用された記述があります。

2. 計測による「人種間のちがい」

計測器については、写真とそのキャプションを参照。

19 世紀後半、計測学が発達。数値の高低が、優劣を示す根拠と考えられた。しかし実際には、意図的、あるいは半意図的な測りまちがい。

白人のサンプルから、インド人（脳の容量がヨーロッパ人より少ないとされた）を排除、女性を排除。黒人のサンプルに世界で一番小さなピグミーを含める、など。

計測回数と「欲しい数値」

参考文献 スティーブン・ジェイ・グールド 『人間の測りまちがい』

II. 表象について

1. representation = re-representation 表象はあくまでも再—現 実物そのものではない。しかし表象なしに実在性はない。

視覚的イメージや言説を含む。

社会の偏見などがどのように表象に反映されているか、だけを見るのではない。表象自体が、どのようなアクティブな役割を担って、社会的言説を生み出したか、助長したりしているかに、目を向ける。

2. 科学的表象

科学者が一般に主張するように、科学的データが客観性をもち、その解釈が社会的に歪められ偏見が生じる、だけではない。

サンプル採取などの段階で、集団のカテゴリー化、ラベリング自体も社会的慣習や偏見に大いに束縛を受けている。それが科学的実験の前提となっている場合も多々ある。

参考文献 竹沢泰子 『人種概念の普遍性を問う』総論 第5節